新吉は汽車に乘つても便所の中へ這入つた。
中は寒い風が穴から吹き上げた。
錠前を下ろしておくと外から割れる程叩く。
新吉は京都行きに乘つとつて、松永驛へ後戻りして、前の若い驛員と驛長とが列車の中へ驅け込んで來て、
『君が狂人だと云ふ事がハツキリ解つたよ。
下關行の切符を持つて君は、京都行きに乘つたりするから不可ないんだ』
と言ひたげな目をして、手を取つて下ろしてくれた。
それから又下關行きに乘つたのだ。
新吉は二等室の腰掛へ横になつた。
置き放しといた荷物を窓から放り込んで呉れた。
新吉は凍死しかけた人が、ぬくもりを感ずる時のけだるさと、此の世にそぐはない樂器のやうな精神狀態だつた。